

つきたい力

生徒が思考を深めて、協働的に自ら学び、表現できる力を育み、表現するための基礎力を高める授業づくり

取組みの概要・ポイント

複数の情報から適切な情報を選択をする場面の設定。
教科等横断的に学校図書を利用した、情報をまとめアウトプットする場面の設定。

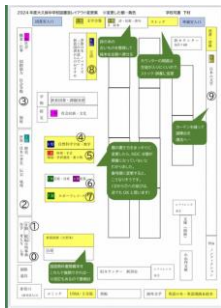


具体的な取組みの内容

本に親しむ場所づくり

図書館のレイアウトを変更

図書の配置が、過密で、分類も見にくい現状があった。学校司書と相談し、レイアウトを変更することで、視界が開けて見晴らしをよくなり、授業で使いやすいよう整えることができ、活用率が上がった。



来館おみくじを設置

他校で実践していた「来館おみくじ」を本校でも取り入れた。来館したときに、おみくじを引くことで来館者のチェックができる。「図書館にいくとおみくじができるし、本も読める」と生徒の意識向上も見られた。

企画掲示を展開

図書館の前の掲示板には「企画掲示」を展開している。図書委員会での活動のレポートマンガを制作して掲示しており、通りかかる生徒たちが「新作だ」と喜んで見ている。図書室への来館者増加にもつながっている。



学校図書館を利用した授業づくり

司書と連携し、授業に必要な本をレファレンス

学校司書と連携し、授業に必要な本をレファレンスしてもらい、いつでも持ち出せるように専用の棚を増設した。また、足りない資料は市立図書館とも連携し、貸出サービスを利用した。



各授業での情報活用のために

各教科でアウトプットまでのインプットの場面での活用が多くみられた。社会科と総合的な学習の時間の教科等横断的な取組みでは、自分たちで図書資料や、インターネットを使って調べた情報をインタビュー形式で発表した。先生方からのアドバイスをもとに、図書資料を活用して内容を深めることができた。課題に対して、どのような情報が必要になるのか、授業を積み重ねていくにつれて、必要な情報を読み取りまとめる力がついてきた。

理科や数学でも、インターネット上に流れる不確かな情報や疑問について、図書資料を活用し、より正確な情報を調べるなど、情報の正誤を判断するための図書資料の活用方法について学んだ。情報過多の時代に、自分で調べ、判断できる力の育成につなげていけるよう、継続した取組みの研究を進めていく。



取組みを通しての子どもの変容

昨年度、「月に1回（昼休み・休日を含む）図書館を利用するか。」というアンケートで、7%の生徒だけが利用すると答えていたが、11月には25%と大幅に増えていた。また、「学校の授業以外での1日当たりの読書時間（10分以上）」の割合も昨年度末の37.5%から11月には46%と大幅に増加している。先生たちの「おすすめ本」を紹介することで、生徒との会話に本の話が増えるなど読書への意識付けもできていると実感している。